

発話障害者向けに、自分の声など人間味のあるVOCA 普及に向けた
収録・利用装置の開発 概要
株式会社ウォンツ
【 報告書PDF 2,756 KB 】

※全体の概要

発話障害に直面した方々が、療養生活において「自分の声」によるコミュニケーションができるよう、その普及にむけた活動をおこなった。

具体的には、以下の3点の解決にむけた取り組みをおこなった。

- ・ご自身の声の再現など人間味のある声を、より安価に・作業負荷が少ない形で提供する
- ・発話障害が一定レベル進行した方がご自身の声を残しおこす利用する実施環境を整える
- ・進行性難病、発話障害の患者に対し、声を残す活動および本製品の広い周知をおこなう

※試作した機器またはシステム 1

ALS患者に最適化した自分の声ソフト「ボイスター」

発話が比較的明瞭（発話内容が分かる、内容を知らなくとも聴取により書き起こせる）な方を対象とし、従来装置のエッセンスはそのままに、ユーザ負荷と価格を下げ、広く普及展開できるように最適化調整した新製品「ボイスター」を試作・評価。製品リリースの目処が立った。



図1 自分の声ソフト「ボイスター」

※試作した機器またはシステム 2

意思伝達装置に組込む自分の声ソフト

意思伝達装置の従来からの信頼性、機能性を保った状態で、ボイスター機能を連携して動作させるに至った。これにより、発話障害・四肢運動障害が進行した後でも、意思伝達装置を使って自分の声をはじめとした人間味のある声で語りかけることが可能となった。

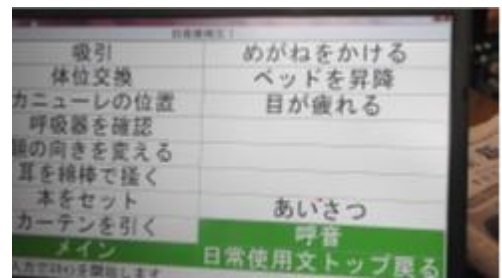


図2 意思伝達装置との連携

※試作した機器またはシステム 3

収録機会の損失を防ぐため SNS 等による製品周知

自分の声ソフトウェアを、発話障害患者および家族に直接周知するための活動を実施した。あわせて患者に接する機会のある医療関係者への周知にむけた課題を整理し、そのうち神経内科医のガイドライン（2013年度改訂 ALS治療ガイドライン）の中でALS診断時の周知対象装置とする目処がたつた。



図3 周知活動例 facebook